

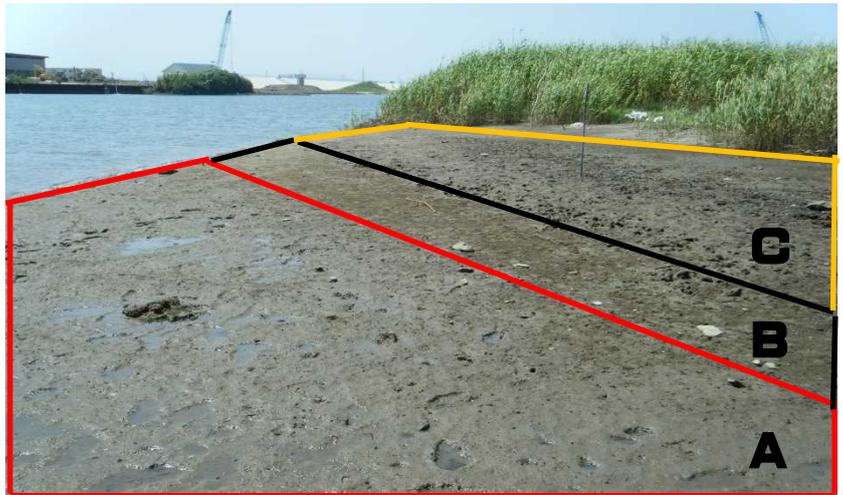
底質とカニの分布

■底質の違いでわかるカニの分布

地形の変化が続いている蒲生干潟では、カニの分布域も変化している。Fig.1は七北田川河口左岸であるが、泥が堆積し、以前はなかった湿地が広がっている。蒲生干潟及び河口域は砂地が多く、そのような環境を好むコメツキガニが数多く分布しているが、Fig.1のような湿地にはヤマトオサガニ、チゴガニ、アシハラガニが分布している。

Fig.1の湿地は、川岸から離れるにつれて乾いていくが、その度合いによってカニの分布が明確に分かれている。最も湿っているAには柔らかい泥地を好むヤマトオサガニ(Fig.2)が分布し、Bには泥地を好むチゴガニ(Fig.3)、Cにはヨシ原に穴を掘って生息する

アシハラガニ(Fig.4)が分布している。このような環境による分布の違いは蒲生干潟の他の場所でも見られる。地形の変化とそれに伴う底質の変化は、生物の分布にも大きな影響を与えている。



(Fig.1 七北田川河口左岸の湿地)



(Fig.2 ヤマトオサガニ)



(Fig.3 チゴガニ)



(Fig.4 アシハラガニ)

※Fig.2～4は全てFig.1で撮影

■イシガレイは採集されず

今回の調査では河口域・干潟内ともに全くイシガレイを採集することはできなかった。2011～2013年にも8月以降は採集されなかったのでこのことは珍しいことではない。この3年間の平均全長は7月に7cmを超えていた。今年7月に採集したイシガレイの平均全長は河口域・干潟内をあわせて5.79cmで、これは2014年の同時期のデータとほぼ同じである(レポートNo73参照)。2014年は成長が遅かった年で、稚魚は8月に8匹、1匹だが9月にも採集できていた。これは成長の遅れにより干潟に残っていた個体ではないかと思われる。

今回の調査では河口域で釣りの餌としてイソシジミを採集している人がいた。イソシジミはイシガレイ稚魚の主要な餌である。また、マゴチの稚魚やハゼの仲間は生息しておりイシガレイ稚魚にとって環境が大きく悪化したとは考えづらい。過去5年間の調査で、イシガレイは8cm程度に成長した個体が外海へ出ると考えられるが、今年のイシガレイは比較的小型のうちに外海へ出たのではないだろうか。